

毛沢東革命と儒教文化の再生

植 松 希久磨

The Mao Zedong Revolution and the Revival of Confucian Culture

UEMATSU Kikuma

(1) 初期毛沢東革命の特質

帝国主義諸列強の侵入によって、すでに弛緩していた中国文明は解体の危機に瀕し、中国全土は半植民地化され、近現代資本主義世界システムの周辺部に転落した。毛沢東革命は反帝反封建闘争を通じて、半植民地状態を脱し、秦・漢以来の地主支配を打破し、独立を勝ち取り、中華人民共和国として成立した。まさに毛沢東革命は、解体した中国文明の再編をはかり、現代における西欧文明の支配に対する、周辺革命のパイオニアとして歩みだした。まず最初にその農民を基軸にした中国文明再編の過程を見てみよう。

清王朝が解体し、中華民国の成立以後、孫文以来の国共合作（国民党との合作）と国共分裂の過程で、国民党が資本主義と手を組んだ国家資本主義の道を歩んだのに対し、中国共産党は毛沢東の指導のもとで、農村を基盤にして社会主義革命の道を歩みだした。前者を西欧をモデルにした一種の後進国革命の道とすれば、後者はロシア革命以上にそれを越えようとする周辺革命の性格を色濃くもっていた。湖南農民運動から井崗山闘争を経て、遠く辺境の地である延安に長征し、その土地に革命根拠地を築きあげた、初期毛沢東革命の道程がそれを証明している。

毛沢東革命は、中国の古い政治経済システムを変革するだけの反帝反封建闘争ではなかった。その過程で小農民・労働者の人間革命が展開され、中国文明の再編を担う新しい歴史変革の主体が形成されていった。毛沢東が中国の「封建的同族支配体系」に対決し、中国農民を縛り付けていた地主権力を武力で打倒するとともに、「農民は中国社会全体を解放することなくしては、自らを解放しえない」といい、農民解放を農民自身の自発的な人間革命の道に組織していったのである。湖南農民運動の時の「農民協会」や革命根拠地における「紅軍」はそうした農民・労働者の精神革命の「ルツボ」であった。もちろん、数千年の伝統に縛られ、古い共同体の生活様式に染まっていた農民の自己変革は容易ではなかった。古田会議の決議では、「紅軍」の中にも肉刑（地主階級の悪習）、個人主義（資産階級の精神）、極端な民

主化と絶対的平均主義（小農民の精神）、流寇思想や盲動主義（共同体を離れた遊民の影響）などが忍びこんでいて、かなめとなる党組織さえ辺境地区の根深い家父長主義・同族主義・地方主義の影響を受けて、「村落内での党組織は、住まいの関係から多くは一姓の党員が一つの細胞をなし、細胞会議がまったく同時に家族会議である」（『毛沢東選集第一巻「古田会議の決議」）という状況が存在していた。その家父長制の生活を打破し、毛沢東革命が進展していくことができたのは、農民・労働者が階級意識に目覚め、自分たちのために戦うことを知ったからである。

エドガースノーが描きだしたように、延安への長征は、軍事的な戦闘でもなく、勝利でもなかった。それは国民党軍や軍閥から逃れる、死にもの狂いの果てしない退却であり、次から次へと危機の迫ってくるサバイバルの道程であった。だがそれゆえに長征は自発的な革命の意志なくしては有り得なかったのであり、その結果、中国の古い農業共同体の地縁・血縁的な家父長制の生活の絆は断ち切れ、革命的エートスを純粹に培養する役割をはたした。苦しいものではあったが、長征の過程において、多くはこの試練を耐えて、共産党の頑強なエリートとなった。この革命の行軍には、農民・徒弟・奴隷・国民党の軍隊からの脱走者・労働者・すべての権利を奪われた人々が参加することによって満たされていった。初期の毛沢東革命は土地革命を通じて中国の「物の再生産構造」を変えていったばかりか、農民の人間革命を通じて「人間それ自身の再生産構造」、つまり農業共同体を変化させ、中国文明の軸心を辺境の地から揺り動かしていったのである。

注目すべきは、毛沢東がその過程で、翻身した労農大衆の姿の中に、中国の農民革命の伝統をまざまざと見だし、それを掘り起こしていったことである。換言すれば毛沢東革命は体制化した儒教イデオロギーに対決しつつも、一方で、孔子から孫文にいたる中国の革命伝統に目を向け、それを批判的に継承していった。これはまさに毛沢東が中国人を、そして中国農民を知り尽くしていたからにはほかならない。抗日戦争期に、延安から反撃に転じた毛沢東は、社会主義革命によって民族の歴史的遺産が消し去られるものではなく、それを批判的に継承し、発展させるべきであることをつぎのように語っている。

「われわれの歴史的遺産を学び取り、マルクス主義の方法を用いて、これに批判的総括をあたえることは、われわれの学習のもう一つの任務である。このわれわれ大民族の数千年の歴史は、その発展の法則をもっており、その民族的特徴をもっており、その幾多の貴重品をもってしている。このことについては、われわれは、まだ小学生である。今日の中国は、歴史的中国の一つの発展であり、われわれはマルクス主義の歴史学者である。われわれは歴史を切断してはならない。われわれは孔子より孫中山にいたるまでの歴史に対して総括をあたえるべきであり、われわれはこの一部分の貴重な遺産を継承しなければならない。遺産を継承して、これを転じて方法となしてゆくことは、当面の偉大な運動を指導する上に、重要な助けとなるであろう。」

これは毛沢東が中国の歴史構造を分析し、中国史を貫く数々の農民蜂起をとりあげ中国の社会主義革命が継承すべき民族的伝統とし把握したことを物語っている。たとえば「等貴賤、均貧富」の観点にたった黄巾の乱、「均田・免租」の政治的綱領を提起した李自成の農民戦争、太平天国の「大同社会」の理想などにあらわれているように、すべて中国の伝統的な大同思想（墨家の「尚同」、道教の「大同社会」のような中間的共同体の思想）の流れに属するものがそれである。したがって、思想史的には墨家にはじまり、道教、白蓮教、中国化したキリスト教＝太平天国革命というように、民間の工農階層のなかに一貫して流れてきた反権力的宗教集団の精神、中国文明の広範な基層文化を形成してきた道教的モチーフがそこにはあった。毛沢東革命は形骸化した伽藍宗教を否定したが、中国文明の基層文化としての道教はむしろ批判的に継承していったのである。事実、中華人民共和国が成立した後、侯外廬や馮友蘭などの中国の歴史学者や哲学者の手によって、儒教や道教が再把握・再評価され、中国史に固有な発展諸段階も明らかにされている。

こうして、初期毛沢東革命は中国の西欧化を乗り越える、周辺革命の足場を確実に築き上げていった。そこでは共産党員を初めとする革命戦士、つまり労農大衆から民族ブルジョワジーに至る、様々な社会階層が一つの新しい共同体を形成した。溝口雄三教授が指摘するように、それは明末から清初にかけて形成されていた反専制主義を標榜した農民共同体の系譜を引き、それを新しい社会主義革命集団に発展させたものだった。それゆえに、延安において毛沢東は抗日戦争勝利以後の新中国は、「新民主主義」の国家であることを提起していたのである。

すなわち新中国は、ブルジョア独裁の旧民主国家とも、ソ連型のプロレタリア独裁の社会主義国家とも異なる、絶対多数の人民・労働者・農民・小ブルジョア・民族ブルジョアジー・開明紳士（進歩的・愛国的地主）およびその他の愛国的人民を基礎とする統一戦線的な民主主義的同盟の国家であるとし、経済面では私的資本主義を自由に発展させ、私有財産を保証し、国家経営、個人経営、協同組合経営からなる混合経済を想定していた。またその文化は「民族的・科学的・大衆的な新民主主義文化の発展」をめざしていた。そしてこの新民主主義建設は長期にわたって継続されるべきであると主張していたのである。

(2) 中華人民共和国建国初期の国家建設

1949年成立を宣言された中華人民共和国は、こうして毛沢東が「新民主主義論」で提起した革命的諸階級の連合政権としてスタートした。1950年6月に施行された「土地改革法」にもとづいて広範な農民は、地主支配から解放されて、自営農民が作り出され、買弁資本も国有化ないし集団化されていった。その結果、確立された新しい五種の経済制度（国家所有制の社会主義経済である国营経済、勤労大衆の集団所有制または半社会主義経済である協同組合経済、国家資本主義経済、私的資本主義経済、個人経営経済）のもとで、1952年までの

三年間の国民経済復興期では農業および工業の主要生産高を革命前の最高水準にまで回復させることに成功した。だがこの新民主主義革命の道は戦後の東西冷戦というきびしい国際環境の中で、急速に国権主義型の社会主義に傾斜していった。

対外的にはいち早く毛沢東がはじめてモスクワを訪れ、1950年2月には「中ソ友好同盟相互援助条約」を結んだばかりでなく、朝鮮戦争の勃発とともに、中国人民解放軍は参戦を余儀なくされ、国内でも「抗米援朝」運動が大規模に展開され、「三反五反運動」（いわゆる民族ブルジョア都市私営工商業者の違法行為摘発運動において、労働者や店員が動員され、大衆的運動となって私営工商業者の違法行為が摘発された）や知識人のブルジョア思想改造運動などの反資本主義的な運動が開始されて、1953年からは社会主義工業化と農業集団化が着手された。

こうして、第一次五カ年計画は開始されたが、それは基本的にはソビエト・モデルを踏襲したもので、重工業優先政策を貫かれていた。そしてこの時期、農業集団化の速度が一挙に速められ、せつかくに作り出された自営農民は国家に付庸する農民になっていった。50年代半ばのこの時期について野村浩一教授は、国家建設、体制の構築への政治的志向と、そして他方、五カ年計画による社会主義工業化への意欲とは微妙な均衡のうえに成立していたとして、前者は国家統一制度の確立、機構の整備を志向し、他方、後者は工業化を基軸に、より広く「富強」への道と信ずる社会主義建設遂行のために、この国の一切の要素を動員しようとする強い衝動をもって姿を現しつつあったとしているが、それは明末以来の反専制主義のモチーフを継承した初期毛沢東革命が、戦後冷戦体制のもとで、国権主義化していく第一歩であった。その結果、1957までの五カ年計画はスターリンモデルで行われることになったのである。

承知のようにこのソ連型モデルの社会主義建設はその中央集権的計画経済体制のもとで中国の政治システムを官僚制化し、また農業と工業のアンバランスを生み出した。そしてそれに対して毛沢東が打ち出したのが、農業を基礎にした工業化の方針であり、農村を基盤にした分権型社会主義への道であった。そのため、農業集団化政策は毛沢東報告「農業合作化問題について」を契機として集団化が進められ、4年ほどの間に完成した。この急激な展開は、土地改革後の自営農民の発展を抑圧することになり「平均主義」が社会主義であるとする風潮が一般化することになった。この集団化政策は、分散的農村を政治的に統合し、食糧調達を合理化したが、それは工業化政策の急速な達成のための動員体制づくりと国際的情勢の緊張を背景としてはじめて可能であった。だが、毛沢東の分権型社会主義の道の本質は、この頃から明確になったソ連の技術官僚制化に鋭く対決するものであった。

翻ってみると、1956年のソビエト共産党大会でのスターリン批判の衝撃は大きく、ソ連はスターリンモデルを現代テクノロジー開発に適応する、知識集約・資本集約な集権化の方向に切り換えていったが、中国社会主義建設の方針も再点検する必要に迫られた。八全大会の経済政策では新民主主義革命を踏まえて、穏歩前進を標榜していた中国は、1956年の毛沢東

の「十大関係論」が示すように、大胆に権力の分権化をはかり、いわゆる大躍進政策の根幹となった人民公社を創設し、農村を基盤にした工業化の道を歩み始めたのである。それを踏まえて毛沢東は社会主義改造終了後の社会における敵対矛盾と人民内部の矛盾をどう処理するかを提起し、大規模に政治運動を展開して、知識分子や愛国分子を含めて55万人を「右派分子」として断罪し、社会主義と資本主義の二つの階級、二つの路線の闘争を展開した。これは現代テクノロジー革命に対応する中国独自の工夫であった。だが米ソ超大国支配に対決した中国が、共同体レベルからの変革よりも何よりも国家主義的な枠組みの確立を優先させた結果、公社を基盤にした労働者・大衆の民主的官理のシステムは、結局は上からの強制された大衆動員に変質し、その伝統技術を基礎にした現代技術への対応も、夥しい労働者と資源の浪費に終わってしまったのである。

(3) 文化大革命とその終焉

こうした時代背景を世界史的に見れば、それは戦前のナショナリズムの時代から戦後のスーパーナショナリズムの時代へと代わっていった、戦後期に避けられなかった現実であった。その結果、中国にもまた社会主義官僚制が進行していった。それに対するアンチテーゼが文化大革命であった。それは理論的・実践的には幾多の誤りを含みながらも、現代テクノロジー革命をテコにし発達した資本主義を拒否し、ソ連型でもない、きわめてラジカルな西欧化への挑戦であり、周辺革命への具体化であった。ここでは文革期の毛沢東の五つの思想（①継続革命の思想 ②大衆参加の思想 ③自力更生の思想 ④意識革命の思想 ⑤土法技術開発の思想）からそれを見てみよう。

①継続革命の思想についていえば、そこには社会主義工業化にともなう技術官僚化、つまり特権的な党幹部・テクノクラートによる政治・経済的決定権の独占、集団搾取、そのもとにおける老農大衆の疎外状況を批判したのである。現実の中国には社会主義的生産関係と並んで小農生産が根強く存在し、上部構造領域（思想や政治の領域）にも、社会主義経済の土台に照応しない古い封建思想や官僚主義、資本主義思想の残存をしていることを指摘した。小農生産を資本主義の温床とみる誤りもあったが、上部構造の革命を促進しなければ社会主義は資本主義のメカニズムに逃れられず、ソ連型社会主義「国家独占資本主義」に変質する恐れがあることを指摘したのである。その結果として中ソ対立は激化した。

②大衆参加の思想は、ソ連型技術官僚制を批判し、国内的にもテクノクラートを拒否し、下からの参加する民主主義を標榜したものである。具体的には、党幹部・知識人・労働者の三結合形態で「大衆の技術開発方式」や「大衆の企業管理方式」の組織、そしてそれを基盤として「革命委員会」が作りだされた。結果的には、行政的枠組みからでることができず、硬直化し、政治と経済、政治と企業、政治と技術の合理的関係をつくることに失敗したが、それは中国流の自主管理の第一歩でもあった。

③自力更生の思想は、閉鎖的ではあったが、即地取材を原則にした老農大衆の「労働蓄積」（農業基本建設）と「頭脳蓄積」（技術改革）に道を開き、経済成長の源となったばかりか、農業を基盤にした工業化の道を生み出し、人民公社の五小工業（小型の鉄鋼・石炭・機械・水力発電・肥料）を基盤にした積み上げ方式の階層的工業体系を形成させた。しかし実際には経済的には不合理で資源と労働の浪費に終わってしまったものも少なくない。しかし現実的な経済開発の方法である一面をもっており、抑制された中国的工業化の道をつくりだした。

④意識革命の思想は、中国の社会主義建設の担い手、人間類型の転換をめざした。それは人民への奉仕と人間解放の精神をもった集団主義的な革命の人間によって担われねばならぬことを鮮明にしたものだった。この意識革命の思想は、中国の革命伝統を洗い直し、儒教や道教の底に流れる節欲の倫理や平等の理念を掘り起こし、際限なく資源を浪費する欧米型の文明を拒否する新しい文明のモチーフを内包していた。

⑤土法技術開発の思想は、中国の伝統的な「技術科学の思想」の現代化を提起したものであった。中国の「技術科学の思想」はどこまでも自然と人間と社会を具体的に結合させた「場の構造」の中で、バランスのとれた適正技術の発展を志向するものだった。だが、この土法技術開発は、古い体制や思想を変革する文化革命を必然的に伴うものであり、それなくしては伝統技術の現代化は不可能だった。その結果、土法製鉄運動に代表されるように、技術革新よりも古い社会的枠組みと古い思想の変革に流れ、失敗に終わった。だが、中国伝統技術を温床にしたような、漢方医療と西洋医学の結合は成功した。

このように文革は多くの問題を残したが、戦後のスーパーナショナリズムの時代に中国に独自の社会主義の道を提示してみせたのである。しかし文革は挫折し「封建ファシズム」に転落した。その真の要因とは何だったのだろうか。

まず第一に、毛沢東革命が何よりも反帝民族解放闘争としてのコロニアルナショナリズムすなわち抵抗型ナショナリズムとして展開されたところにある。そこでは共同体の変革と人間革命を追及しながらも、国家の独立と民族の解放を優先課題にせざるを得なかった歴史的限界があったことを指摘できよう。ことに戦後のスーパーナショナリズムの時期の米ソ超大国支配への対決は、その国家主義的枠組みを否定なく強化させていった。

中国の李沢厚も、『中国現代思想史』の中の「啓蒙と救国の二重変奏」でそのことを指摘している。1949年の中国革命の成功は、社会全体、民族全体の「文化—心理構造」に大きな衝撃を与え、何千年何百年も踏襲されてきた因習のいくつかも除去された。たとえば、男女間の経済上、政治上、観念上、それに家事労働上の空前の平等が、少なくとも知識人や政府機関の幹部の間では、かなりの程度、実際に実現している。これは数千年来の旧伝統を打破しただけでなく、多くの発達した資本主義国家をも越えるレベルに達している。しかし、社会発展史の必然の法則と、マルクス主義の集団主義の世界観・行動規範が伝統的旧イデオロギーにとって代わろうとしたその時に、封建主義の「集団主義」が姿かたちを変えて密かに侵入し始めていたというのが、それである。

確かに、整風運動や思想改造運動は、革命戦争の時期には大きな成果を挙げた。しかし、これを平和な国家建設の時代にまた持ち出したことにより、かえって資本主義より遅れた封建主義に対する警戒や批判を妨害したり、ゆるめる結果となってしまった。とくに、1950年代中期・後期から文化大革命まで、社会主義の仮面をかぶった封建主義がしだいに頭を上げ、猛威をふるい、大々的に資本主義に反対し、ニセ道德の旗を高く掲げて、犠牲的精神を高唱し、「個人主義は万悪の根源である」と宣伝して、人々に「私心と闘い修正主義を批判し」て、堯舜のように聖人になることを要求した。その結果、中国人の意識は、封建的伝統の全面的復活の窮地に追い込まれてしまったのである。差異を否定し個性を消滅させる平均主義、権限の範囲が不明確で何にでも口出しする家長制、まるで鶴の一声のような、お上からのお達示のようにあれこれ命令したがる唯我独尊、尊卑の秩序に厳格に注意を払うランク制、現代的な科学技術教育の無視と軽視、西欧の資本主義文化の排除と拒絶、これらが「実質的農民革命」の巨大な勝利とともに、マルクス主義的社会主義あるいはプロレタリア集団主義の名目において、意識の範囲の有無は別として、社会全体、知識人全体のなかに蔓延し、人々の生活と意識とを支配するようになっていった。

その結果、第二の要因としては、毛沢東革命は極めてラジカルな反西欧化の運動であったにもかかわらず、結局、マルクス主義のもつ単系的発展段階論を大きくは越えられなかったことがあげられる。毛沢東思想はマルクス主義の普遍的真理を中国の実情に結び付け、マルクスの社会理論を第三世界の民族解放闘争の理論に仕立てあげた。またその過程で農民革命の伝統を深く掘り起こし、中国文明の巨大な再編を行って、中国に独自の社会主義発展の道を切り開いていっている。だが、中ソ対立のなかで中国は自らを絶対化し、毛沢東革命をマルクス・レーニンを超える現代最高のマルクス主義に位置づけていった。過渡期の社会主義の多様性を認識せず、ソ連型ばかりかユーゴ型の独自性は認めず修正主義と断罪してしまった。結局それは、社会主義の民族化に止まり、スターリンの「一国社会主義論」の枠組みを大きく出る事はできなかったのである。

第三には、毛沢東革命は経済主義とは裏腹な上部構造還元主義におちいっていった。社会主義の発展段階を無視して「政治第一」「人間第一」のスローガンをつきだし、プロレタリア独裁の強化と国家所有の拡大に走り、資本主義経済と社会主義経済の区別をなくして、階級闘争万能主義の歴史観を形成した。その結果、硬直した行政システムの枠は破れなかった。

第四には、中国文明再編にかかわる問題として、毛沢東が農民革命の歴史的遺産を批判的に継承し、それを基軸にして、中国文明を再構造化したが、その歴史理論が狭い階級闘争史観に俺れ、中国史の複合構造を単純化してしまった。確かに戦前の「停滞社会論」は完全に打破され、中国の基本生産関係である「阡陌制」や「均田制」、「佃戸制」といった国家的土地所有制度のもとでも、小農民を基盤にした個人的所有の各種の発展があり、それがたえず農民革命を引き起こし、歴史を推動させていったことが明らかにされたが、しかし、その農民は一連の社会主義集団化の過程で自立性を奪われ、人民公社制のもとで国家に付庸する農

民に転落していった。地主支配は廃絶され地主による収奪はなくなったが、社会主義的所有制のもとで、個々の農民の余剰は国家の手によって収奪され、農民の自立的発展の道は閉ざされたのである。結局毛沢東革命は中国文明を再編し、ラジカルな西欧化への反撃を展開して、現代における周辺革命の道の第一歩を踏み出しながらも、資本主義システムを乗り越える歴史理論と社会理論をまだ構築できずに挫折したのである。そればかりでなく結局のところ国家を絶対化したアジアの専制主義を引き出したのである。

参考文献

- 小林多加士『中国の文明と革命』刀水書房 1985年
エドガー・スノー著 宇佐美誠次郎訳『中国の赤い星』筑摩書房 1964年
『毛沢東全集』I「民族戦争中の中国共産党の地位」人民出版社 1952年
李沢厚『中国現代思想史論』東方出版社 1987年
溝口雄三『中国近代思想の屈折と展開』東京大学出版会 1980年
溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会 1989年
野村浩一『現代中国の政治世界』岩波講座現代中国1巻 岩波書店 1989年
野村浩一『中国革命の思想』岩波書店 1971年
小島晋治『歴史と近代化』岩波講座現代中国4巻 岩波書店 1989年

(本学非常勤講師)